



桃譜為一集  
全





俳諧百一集序

越中康工選

歌也百人一首ありて是亦子連亦仙ありて是亦分りて  
 子也ありて子と<sup>予</sup>此道子抱心好く以て一と慕ひ今其  
 ば子言以感乃ありて子みりてその人々と画さる夕  
 師と伴さ友と巻さるて何れも好くも道くを道乃  
 俳友<sup>予</sup>も加りて松木子のそりて子也其のそりて子也  
 頃子身武ありて文子宗鑑寛永子貞徳貞室系子  
 子立圃重頼季以寛文子宗因かく世に子先達者と

以之其體一子中出下一爰中桃青初正思正實  
眼前乃その中不易乃其正一みと多正流行正中  
中有て教る乃體を形一其妙境と踏下天下幾下  
芭蕉風中飯杜子西行と多正や一古今乃名師  
外門人中去來有正實情一其角夫草嵐雪  
涼菟北枝各よく翁乃風旂と正許六中文中  
其考者風雅乃血脉と其正附正句正頃乃一人中乃万騎  
中正下正乃正中頃乙由出正滑稽自在乃古有正

朽中乃風流とあやう正今正海内正人中乃正と正  
何中ちち正乃正物中乃正造化乃神  
と多正とく正乃多正且正家眼力乃何正乃多正乃多正乃多正  
鳴正作正者正も秀逸と又正乃正乃多正乃多正乃多正  
一句乃古くも多正と多正て載正之則百一集と題正乃  
や註正者正も是正とけ正と多正と古正人正も正其正句正く  
乃意乃正乃多正乃多正乃多正乃多正乃多正乃多正乃多正  
初正乃人乃多正乃多正乃多正乃多正乃多正乃多正乃多正

百  
あつきのこの一二と述ぶのこ

寶曆十四年甲申夏五月

八椿舎自序



芭蕉  
水乃音  
蛙氣  
古池や



吟のふり意味や有久吟一うなみうを流し  
唱へたるをみ自れと何の日の中へ下りても  
外へ凡多乃及ふ不承の故去と新と小く  
移歩の信と一保へ

元朝也

神代

乃

事

思

守武

此神職や古代よりあり

此源を招きし



乃古乃山

宗鑑

之

物

乃

乃

元朝

今乃世と云ふは元朝也  
世乃朝と云ふは



新法師

乃

家乃

月也

負德



望一

常小耳と目小一  
万物と考ある心泰山乃

月也

家乃

乃

新法師



負德

名家乃手匠

是者くと

々々々

花乃

乃山

貞室



妙境木のり  
芳那乃ぬ人乃目と弄し  
世一勾小此山乃教景に  
ま

一ひま

師是乃

中ひま

衣織

立圃



国月乃吟小  
云と一む高世乃

調うと

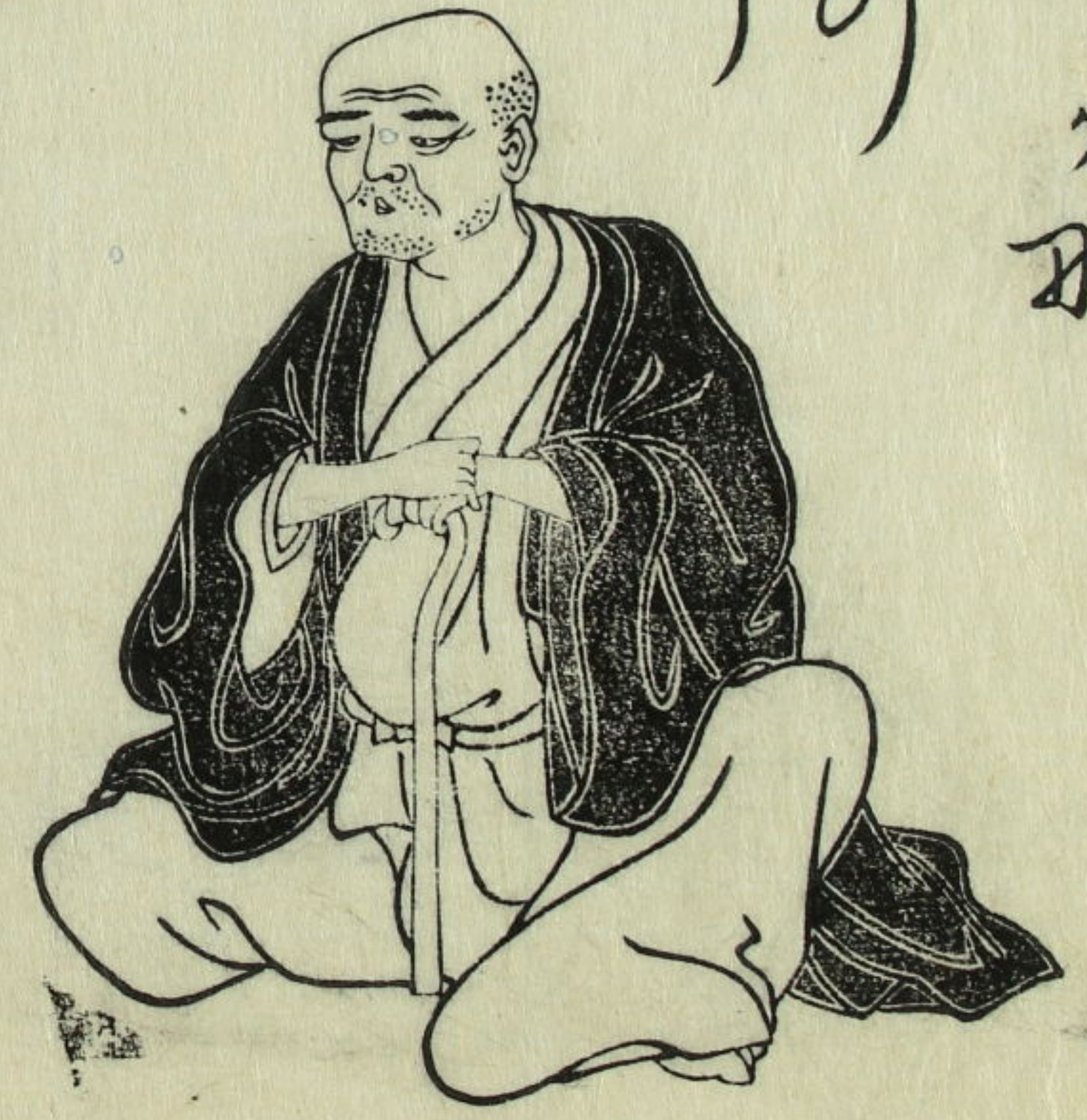
夏 其 如

重頼

順 禮 乃

棒

を へ り



棒をくく上へ棒乃之  
形をた枝を

杖乃と  
心と真の心

花 乃 如

季 吟

あ さ く

い く く

一 僕 と



詞 然 然 と かり 意 亦  
味 不 っ っ け り 子 を ぬ っ っ



急事急之於

湖春

師走

山

山

乃



一与乃塩梅り四季乃

風来り  
大免る塩能之

白

分

別

乃

宗因

宗因



急事急之於

稻妻也

さのふハ

東

くさき

西

其角



秋乃辰乃かりり  
其角  
母さ小おまや又いさるんと世乃さゆと  
記しりりち通ふ心乃りまきと哲人と  
恨きる詞と強しりりち乃意味と含み  
絶作し

夕乃見龍

鳴鳥

声小

牛阿る



自花と眼乃前阿道系みい  
妙る進志ニ垂乃りむしりり者  
人しりり腸と断しりり

東山

嵐雪

たつた

たつた

蒲團



象り乃深小一と誦す  
平安乃景こるる度了

中聞ふ

應くとん

きくや

乃

乃

乃

去来



随闻記

夫抑 夫考曲翠正秀其角 許六お乃く称嘆  
の是も復小略去来善回悟 念さ参や古之自賛小  
曰此句小自能く寂乃るくぬると才一とつひ侍り物中  
翁乃句ハ強も弱も何るも者重句もつて是も此之寂乃  
附もと皆くちやむ心

取門の娘

ち〜て

う〜

蛙

の

夫艸



爰小の道とてさるるも  
此人乃悟道とてさるるも  
鳴呼

風乃

一日

吹

風

子

り〜

涼菟



者乃〜  
吹るるも乃  
於骨とてさるる乃  
絶唱とてさるる乃  
乃〜

ま〜くや只自然乃

陽春

乃

也

秋乃

許六



雨後乃朝日うららかにふりそよ風  
吹く小陽春乃三つらくとくはるの  
何となく幽ふ〜と真小春乃三つらく

夕

何

乃

々

纒月

北枝



百尺乃竿頭つゝ

ほの 妙手候

福一足 野坡

結女也

垣乃

此亦乃

何の屋主と  
よく不易  
ろアケ

流りよもは  
きり



月如也

青葉

山郭么

心經

素堂

鑑倉乃  
心乃  
常素  
昂妙  
小  
三  
恒  
切  
乃  
絶  
頂  
之



浅之砂川

冬乃竹  
秋乃竹

乃竹

杉風



秋乃雨  
尚白

木乃

乃

乃



細らう小しと物をとりこころ  
るぬ 空物とあまんま

子も何ん

信徳

生か

今日

名月々



雑詠集の曰今年就中腸先断  
と白氏乃年と悲し〜この意も  
かこゝろ老乃ききぬ〜と  
よも〜ちりけ〜るの顔之

春乃乃

く〜  
〜

〜

鬼貫



何れ〜不〜真小  
〜乃〜七〇〜小言外乃妙なり  
〜八時〜乃〜時中

春乃乃



風乃

果

有

海乃音

言水



世々乃  
風乃言水と稱す  
則碑乃銘不殘

表

表と

ちり

心

手みち

木因



やまうふまひかう  
えもゆらぬまふ乃  
うらひま

あはれ道一 一笑

かき

雨

まき乃るる



かき乃るる色とほくろ  
又乃るる他知外

大乃

月乃

め

七十一

任口



おふと八月を  
めりしあきそふ乃昔男乃金声小  
仍る七十二ち別此上人乃筆乃  
詞花を承きしそふ乃

唇  
子

了  
子

児  
乃

つ  
く

さ  
み  
し

千  
那



篇突小曰くつりりるる小  
多極と極一極もくさくさ乃  
情ふ是とて 翁も一復一句と感ふ

老  
木

那

木  
節

る  
白

し  
け

花  
咲  
も

百  
花  
乃  
中  
り

ま  
じ  
り  
自  
然  
乃  
寂  
と  
唱  
く  
感  
ふ  
呈



枝竹也

高き

しな

二

三本

万子



母くし入る  
意味不涉  
海棠子香なり  
金掃不敵なり

月夜之影  
露川

海乃

しな

分別也



心も初も及ぬ  
海系とて  
月乃に  
しなと修ま

彼都良香り  
三千世界眼  
前ニ盡すと

しなをくし

高次可也

秋之坊

可也

可也

月十秋

高次可也

此位常之閉口小似



可也

可也

余

可也

可也

梅

尼智月



上又

言語道断乃可也

蕉翁父  
東六條  
御門主様  
海連枝越中  
井波園御坊  
瑞泉寺殿  
浄院主也  
中野寺勅額所  
有法回国御坊  
と始也

麻からび

踏とび

宵戸

の

月乃の形

浪化

申無辨小似く世民乃  
意向く上人乃為悲を縁とく



秋乃屋

正秀

分乃

約針や



殺生乃法よゆみもちてゝま  
秋屋乃ありまゝ入ふ

うらやま  
おとよ

切

時

猫乃意

越人



浪化君乃聞書小曰  
定家乃乃

うらやま

のうらやま

坂乃那

尼

芳樹

秋乃

中

焼

等乃さや



桃門小方乃うへ乃意乃  
皆白き道二章をその所とほそ

唯情

麦喰

とちん

そのま

如

野水



随聞記

ゆきとちんちんのをささみ小僧くく  
なくてそ人ききくくく

是小仍く

うま時

養乃

を音も

雨秋

山



曾良

堪合日くくす付いとる  
出くく塘乃ききとまつ  
音乃居乃秋乃あう海と流く  
名ぬらくくく乃文をきん  
のきくくをききとまつ



牛乃角  
句空

置者

分入

梅、香や



梅乃けくうに忍多はくくつり  
下みくくく十月とくくくく

秋乃雨

凡兆

高積  
の  
下京や



浪化君乃聞きう回上ふとく  
五くくくくを翁乃くくくくくく  
くくくくくくをくくくくくくく

古今交遊記

あはれ

あはれ

白紙の

是式部、厚情真、董の、一  
手もと乃、ふ、く、執、  
是とおもひ



その

ふりり

友吉

四角

月

天科乃

月、四角、ふ、け、ま、と、あ、  
く、光、も、あ、み、く、と、い、ん、こ、お、  
一、作、く、田、毎、と、い、る、人、と、や、い、ん





乃女成之

葉

はく

ら

おま

二水



花の時は花とおまむ花の  
時をたふきまのふあ乃放逸も  
い登るのふ

男

一

床

乃

山

とよ



世をたふし一床床小る  
歌屋乃達詠小る乃女乃情

ま  
ま  
ま



家子

〜

依

中

初乃

とめ

臣流小真あり 實あり  
此婦人乃心も 不手心 知るる

志 群 指 あり



女 節 系

教 乃 思

身 也

西 米 乃 種 也

す へ

不 易 乃 功 あり 心 志 あり



枯と

思ふと

中

お

梅乃好

從吾

虚有り實有り

寂奇く



夕暮も

曙も

水

鶏足

美

巴静



秋乃夕乃何り色もつり曙乃  
もやのち何りと鶏足乃何り  
りよ涙とらぬ小迷ふ意ありとこ  
こく乃

浮城と何り

初霜や  
 秋意の  
 ころも  
 持ても



鬼士

腸氷とよきを秋乃  
 老乃  
 寂まあ好情よをくろく

満

...

消る  
 石焼



辨三

地底も消る  
 自らやと持てる  
 響取小玉乃  
 又さ

...



物  
お  
ま

人  
者

う  
し  
ゆ

火  
燧  
小

左  
静



もろまろと小名画乃

細色と

うらハス

二  
月  
夜  
の

あ  
ら  
ふ

麻  
乃  
声

五  
竹



幽小字のふりかへ

よくて感懐不斜

涼

さ乃

もとの

常也

神

路

山

尼  
素心



本ト乃常トのい〜つげも  
うぬ〜ゆゆ乃時乃ゆゆ  
〜

曉也

灰乃

中

中

〜

淡々



少子、ゆ〜の中小  
此實境ゆ〜ん  
〜ハ

山路之船

石物心

鳴

雛子

常も船の山路乃つて  
声とてあつちるは  
よく閑寂ふ

司鱸



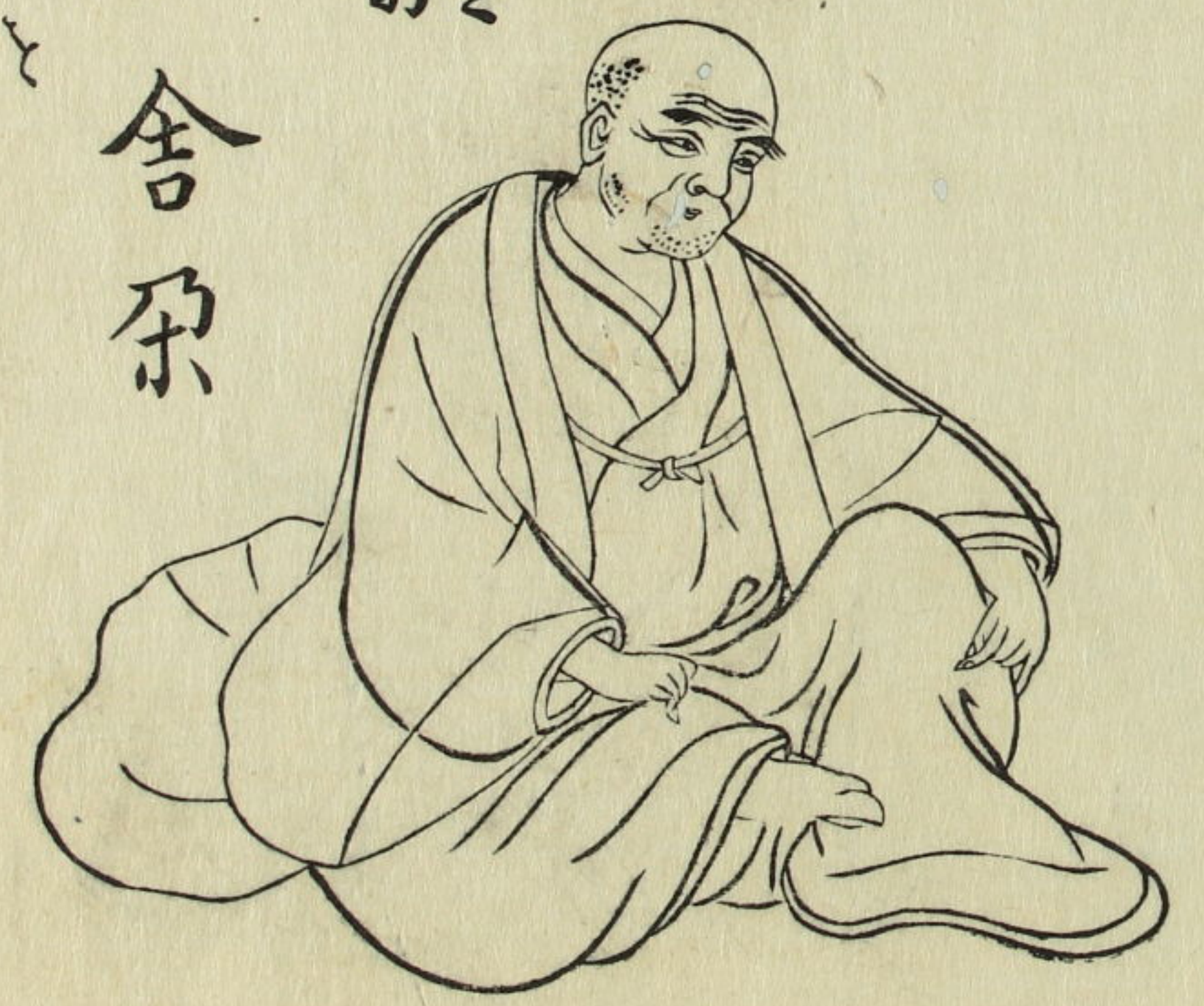
将くと

比叡乃

去る

衿

舎



母と坊主子乃哀情と  
歌と目睫連乃  
昔もと

桃乃花

ちりり

鶏乃声小

鶏合乃つちとすを作  
いふひあつ  
ちりり物珠

春波



おき

ちりり

橋乃

ちりり

素風

橋乃涼しきと  
あつちりり  
そら乃威あつちりり



子鳥山 杜菱

ふん

とと

人者

砂  
のり



尾羽奇麗  
割る長

喜乃色 秋瓜

所子

細之

青柙也



曲節自在



里 念

蒼 家

時 如

麻 父



切切と不堪聞  
都迄くさし深草乃里  
あまきつ乃侍とそとく  
ハ乃字乃佛子言外乃  
可なりと旅情さしり是之

何とんそ

声乃

鈕や

衣の

箱子

岸 虎

心 細



自和と物凄

蘇乃花

噴

日

乱

禹洗

蘇乃句  
其二乃珍作と

一



音乃秋の

面法

ヤ

心

生可

まけぢ

目ま





知中

ひびく

芳

柳

左菊



妻林師乃評  
万山乃花ハ多にあり  
心感心不才  
細工も多と云ふ  
是ホ乃白と云ふ  
実系と云ふ

一ツが乃

灯と

中

ひびく

くさ

鳥酔



一點ノ漁燈香雪溜ノ中  
ちまうりや 似うらふ風景  
まじりしうら  
まじりしうら

灯火と

己の心

月あり

夜乃

名

蓼太



寐さあふとみ分るる免る  
心と沈しきる此夜ありん

見風

みくさる

人

心

中

待



形中より望む乃月と云ふ  
独寐小竹深もくく下みみ  
よく御真子

滑靴乃かゝりみ

十者乃也

星也

斗也

鳥

有之ハ

志々くとハ言乃其乃治子々  
百千乃声ハ津不妻乃や乃  
働之威徳注之也

凉代衣



くは

晚九

度氏

竹田

養  
笑  
と

時節乃言之守乃乃  
以備をおもむ合セ之乃

味亦新リ也



百有り也

亦も

とちの

己多



夕部 知乃乃 己多 亦も  
含く 亦も 己多 亦も  
作 忘 流 っ っ っ っ

結

を

好

い

か

封ト



物 語 分 と 乃 乃 己 多 亦 も  
大 象 變 々 毎 々 己 多 亦 も

其汀

其慕の如

其慕る

其慕る

其慕る



其慕る乃つくまゝの如く  
月々乃ちくく移り其慕乃  
其慕る乃ちくく移り其慕乃

交琴

其慕る乃ちくく移り其慕乃

識り

其慕る



其世乃人との友と  
其流乃閑居乃其流  
其世乃人との友と  
其流乃閑居乃其流

柎几



初

夕

あはく秋乃...  
かきし...  
時乃...

お

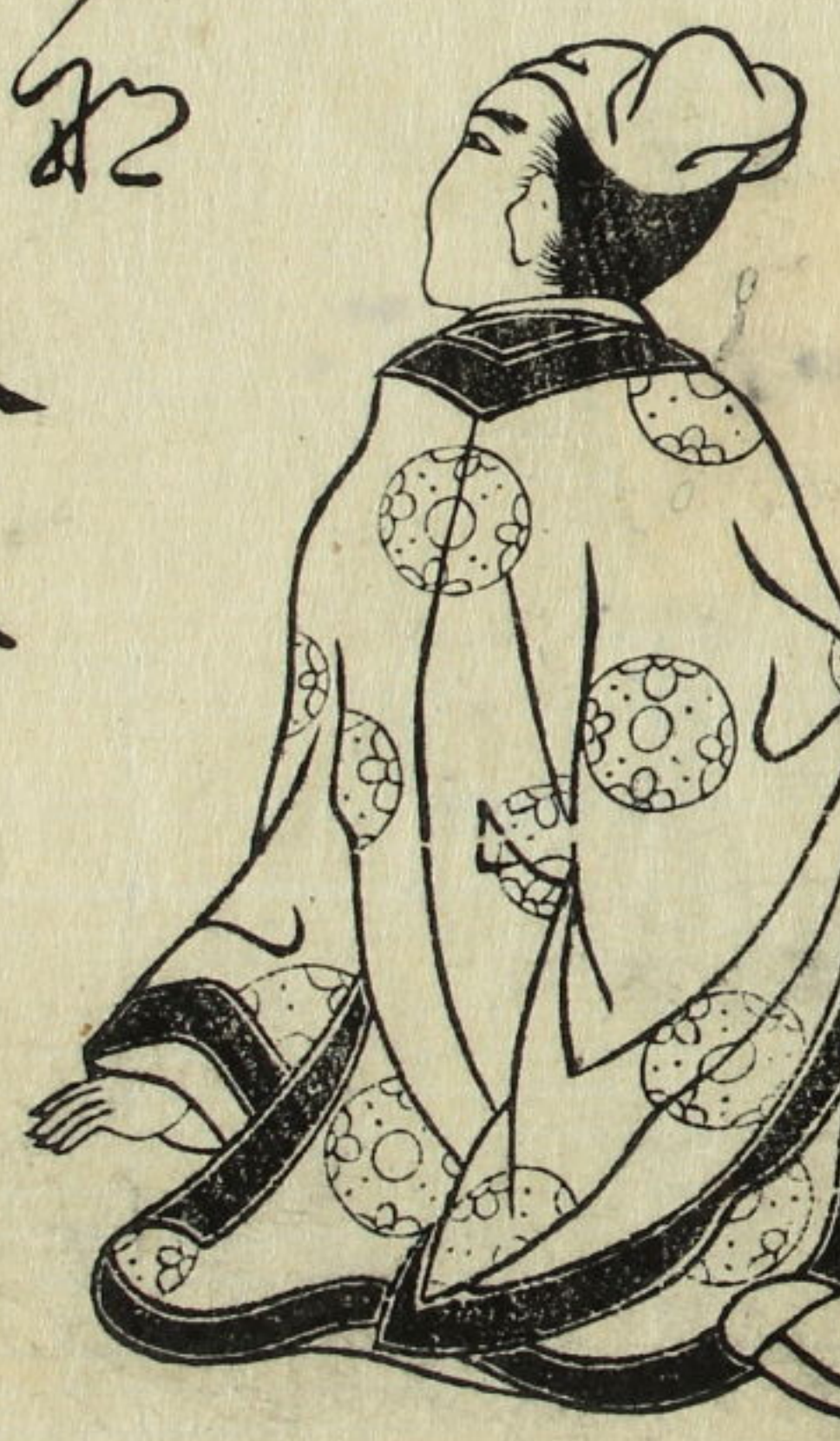
静

出

乃

茶

の



大阜

よく四時乃...  
冬枯乃...

杉原一

落心

ととや

乃河

門瑟



哥仙小も遍昭と  
琴とく白をくをくをく

日  
中  
乃

花

静

蛇  
乃  
乃

麥水



花乃くハ多手ハ世乃人ハ能ク  
越向を改し者泥中乃運乃

卷阿

以喜心

東之

名也

梅之也

梅のありてを流け  
涧水東に流て復向西

ふと乃ち芳なり



高乃新 芳人

積ても

何と

西の也

五名一よく居りて  
居胡たさ





中

乃

山陰

梅乃

闌更



そはけそそのしはりきり  
善景三つと眼中小町屋

山家可枝

乃

乃

乃

乃



中古乃風骨とほら

生蓋の形

櫓乃

戻る

長らひは小



汪由

進退花小執心一しつこも言  
くむまのりつし備あし語

やま一くつひふさる

穢ハヤ

音乃

あ

ろ

あし物

既白



言とつひまて曉出山乃さゆ  
陸小つとつひまてその宗音乃  
身極おとく五分情厚

初鴉

三ツ

四ツ

あ

あ

あ

馬明



法がうたふに  
そのまゝとて  
幕画乃草野  
るる心持

禱叩或静

高

あ

あ

あ

あ



該笑り寂色阿呈

梨乃花

咲

豆

明

蛙

康工



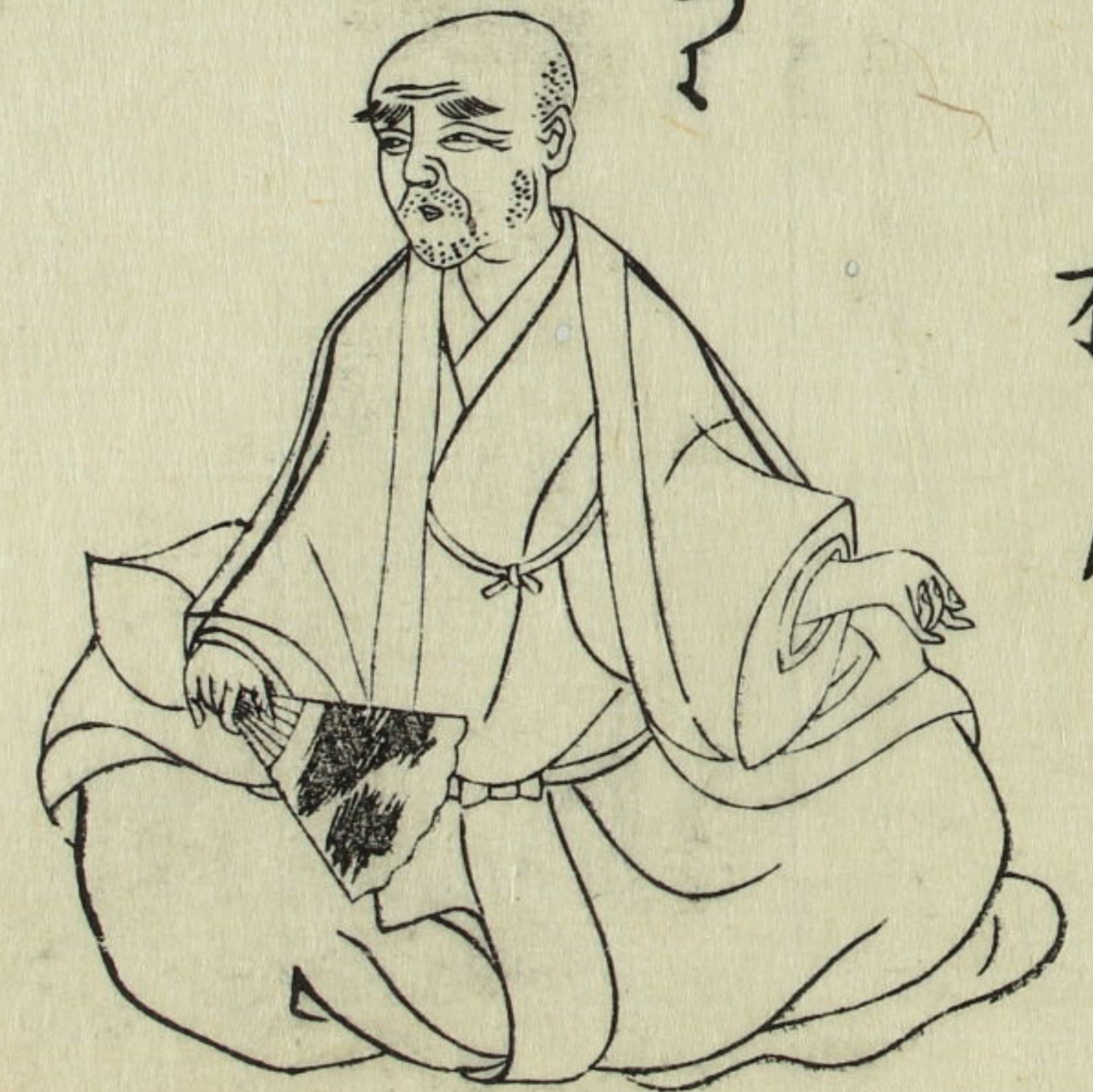
此の好むものも乃も其の好むもの世に上り評を  
請ふ事あり爰に毫と扱ふに

夕  
夕  
員  
栞居

有  
有

竹

梅



人々も乃も其の好むもの世に上り評を  
心と世に涼しく真や〜 厚情尤優長也

初喜の如

盧元

換

以乃

乃



大事不立ひふやーちま  
すはもかーー乃乃たのま  
作りかーー一字乃転ーみる  
んすらかや

榮、船乃

立枝も

よ

羽



希因

死ーまる物と  
活ーその要眼前  
所ーくーくはくはく自れと有る  
志のも立枝妻乃字以の是も佛  
優小すくーのつーくけさー

飛く山 麥林

ふむ

家

ん二鳥



その心乃てむしりみしり  
おくりてす人もさむしり  
ふもさむしり 天性不思議

神境と云ふ

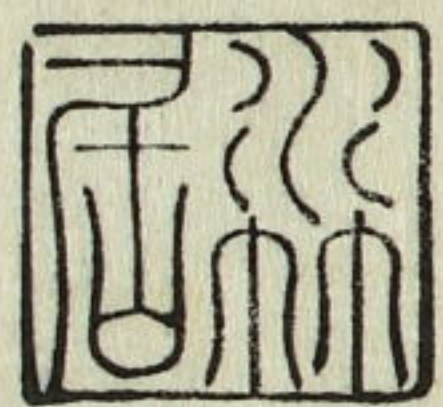
辨林百一集跋



余嘗善辨之言淡而不厭詞而  
文亦立之之次蓋原也乎古國  
之變之來也尚矣繼作有人而  
桃青者興焉故風大振日鍊月  
鎔愈出愈奇噴吐而頑也夫  
性靈之發於天機者於素

百  
五十三  
籥之生也吁呼嗚嘽變現无  
究以陶冶性情發泄渣滓豈  
之无裨於世道乎哉今斯  
篇也无名生一曰生百而吹  
系不同亦可知河康工民困  
心不謂深巧橐籥之功而濯  
于治之中者余未知誰之至

矣者但知其簡而文澆而不厭  
之為可善焉而已是為鼓  
詠水竹散人書



1765

明和二乙酉季四月

京寺町通二條下町

橘屋治兵衛梓



